

草津市立矢倉小学校通信 令和2年8月3日 NO.8



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

人を介して身につける

私が生まれて初めて、物語の本を一冊、自力で読み切ったのは、小学2年生の時だと記憶している。題名は覚えていない。とりたてておもしろいということもなく、なんとか終わることができて、つかれたなあという感じだった。が、最後まで読めたとみんなはよろこんでくれた。それが報いだった。

当時の小学校にも図書室があった。が、新しい本はほとんどなかった。今のように気軽に読める絵本も、調べ学習に役立つ図解本もなく、目につくのは古びた物語の本だった。たまに白黒の挿絵がところどころに配された科学読み物、植物や昆虫の図鑑、統計年鑑、百科事典があるくらいだった。それでも本好きな子はそれなりにいた。私はそんな仲間たちから、このシリーズはおもしろい、この本は笑えるなどという口コミを得て、本に出会っていった。読み終えた後、仲間うちで思い出話のようにしてする雑談がまた楽しかった。

子ども向けの本はわが家にもあった。少年少女世界文学全集、50巻である。本好きな兄が求めたからだろうか、ある日、わが家にやってきた。父は本棚に全集を50冊、ずらりと並べて言った。「飾るだけじゃもったいない。全部読みなさい。」と。試しに一冊を取り出し、中をみると、やたら字が細かい。字ばかりで挿絵がほとんどない。しかも、5cmほどもある分厚い代物だ。「少年少女」とあるから小学生のうちに、すべてが読めないとどうなるのだろうかと不安になった。が、同時に、自分はまだ小学2年、4年の兄に向かって言ったことだ、そのうち父も忘れてくれるにちがいないと、考えるようにした。

兄は時間を見つけてはせせせとその全集を読み進めていった。昼間は友だちと外遊びをし、夕方帰宅すると宿題をささっとこなし、私と一緒にテレビも見ていた。その合間にじっと読みふけるのだ。時折、くくっと笑い出し、そのうち涙を出しながら笑い転げることもあった。そんなときは、どの作品なのか、どういう場面なのか説明してもらい、一緒になって笑った。そして、兄が読み終われば自分が読んだ。そんなことがたびたびあって、読書の邪魔をされるのがいやになったのか、兄はこんなことを語った。「自分でみつけて読むのが一番いい。人に言われるより、よくわかる。読み始めは我慢して、でもそのうちおもしろくなる。本は、おもしろいばかりじゃなくて、すごいなあと感動するのもある。とにかく自分でみつけるしかない。」と。しばらくして兄は全集をすべて読んだと宣言した。父はそれで満足したのか、すべて読むようにということはいわなくなった。そのころ、私以上にまったく本を読もうとしない弟に手を焼いていたからかもしれない。やがて、高学年になった弟が歴史マンガばかりを夢中で読んでいるのを見て、これでいい、こうやって本が読めるようになっていくのだと言い放ったのにはあきれた。同時に、兄と私は、そんな甘いことではダメだ、どうして叱らないのかと訴えもした。そうこうするうち、私は全集を読み切ることもなく、兄に教わったとおり、目にとまった作品をつまみ食いをするように読みかかり、気に入れば最後まで読むという、そんな読み方が身に付いた。弟はというと、ずいぶん後になってわかったことだが、なんと全集はすべて読破したという。

子どもによい本さえ与えていたら本が読めるようになるかという、決してそうではない。無理強いすれば本嫌いとなってしまう。子どもが何ごとかを身につけられるのは、そのおもしろみを手引きする誰かを介してのことなのである。もうすぐ夏休み。短い期間だけれど、決して無理強いすることなく、いっしょになって楽しめるものごととその場を大切にしたい。

校長 大林道範